

人生の扉を叩け！！

藤田保健衛生大学（2018年10月より藤田医科大学）大学院 元教授
IMIA 日本支部代表 竹迫和美（旧姓野田）

女は大学に行くな、就職してもお茶くみ、結婚したら寿退社し専業主婦になるのが当然だった。そんな時代に一生働こうと決めた。公認会計士を志し早稲田大学商学部に入ったが簿記1を履修しただけで不向きと感じた。次は通訳者を志し、第二外国語のスペイン語を上智大学の夜間コースでも学び、早大4年生の時に日墨政府交換留学制度でメキシコに留学した。女性が働くには夫選びが大事と思ったので、21歳の時料理と家事が得意で「君が働くのはOK」と言った人を結婚相手に決めた。卒業の年はオイルショックの影響で男子の就職さえ困難を極めた。4年制大学卒の女子は面接さえ受けられず、多くの学友が悔し涙を流して故郷に帰りお見合いで結婚した。私は焦っても仕方ないと腹をくくった。この時代を生き抜くには度胸が要ると思った。就活はせずNHKに電話し「ニュースセンター9時に出演したいのですが」と言った。電話はあちこちに回された後、責任者と話せた。「人生を開拓したい。語学はできません。」とアピールした。「一応履歴書だけ送って下さい。」と言われた。学問で身を立てる方が確実と思い、公費の大学院留学試験を目指していたら、「明日来られますか？」と電話があり、行ってみたら最終オーディションだった。候補者には女優もいた。「何故、オーディションに来たのですか？」と質問された時、タレント志望ではない私は「昔は、男は度胸、女は愛嬌でしたが、最近は、女も度胸の時代です。学友たちは運が悪いとか社会が悪いとか言うけれど、私は何処かに扉はあると信じます。」と叫んだ。選ばれて一番驚いたのは私だった。1年間番組に出演した結果、自分に才能はないと分かったが、外国語でのインタビューは楽しかった。

30歳からの十数年間は子育てに必死だった。次第に働きたい思いが募り家事は手抜きで猛勉強した。仕事をしないと語学力は錆びる。失敗したら二度と仕事は来ない厳しい通訳の現場に戻れるか不安が募った。夫がチリに赴任したので共に5年半暮らした。

この日々は仕事人生にとって何の意味もないと嘆いてばかりいた。しかし、人生の出来事には後で扉を開けるためのヒントが隠されていた！ チリで子供はよく病気に罹った。私には言葉は理解できたが、文化的背景が違う医師の治療法には納得がいかないことが多かった。例えば日本では軽い熱でもプールに入れないのに、何故39.7度の子を水につけるのか？

帰国後、阪神淡路大震災の折、日本語を話せない外国人患者が病院に殺到したと報道で知った。「若い君たちを残して通訳ボランティアには行かないけど、10年後まだ外国人患者が困っていたらお母さんは尽力する。」と誓った。51歳の時「お母さん業を卒業し、学生になる。」と宣言し、東京外国語大学大学院通訳専修コースに通い始めた。往復6時間かけて通学し週二日は徹夜し通訳訓練を受けた。修士研究は医療通訳者養成の必要性に照準を当てた。ボランティア仲間が「そんなに研究好きなら博士号取って、医療現場で起こる言語と文化の課題や医療通訳者の重要性を私達の代りに社会で発言して！」と言った。それが私の使命だと感じた。そこで、6年間家族と別居し、59歳で大阪大学から博士号を取得した。その後、藤田保健衛生大学大学院に就職し、63歳で定年退職した。大学教育は専門分野を英語で講義する時代が来る。次の扉は米国の大学院への入学。70歳代になっても、医療系学生に対し外国人患者の文化障壁について英語で講義したい。

上記を別の視点で綴ると：医療通訳者という新しい職業を日本で確立する使命を胸にIMIAの同志と歩んできた。重責に耐え切れず生きているのが辛くなった時期もあったが、家族や友達が支えてくれた。失敗や挫折から学ぶことに意味があった。今後も扉を探しながら社会の役に立ちたい。

（朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。）